救命「もしも」に備え

初の大役 愛媛大病院・杉本さん

過酷な道のりを走る出場ランナーの「もしも」に備え、コース上から見守る「救命ランナー」。医師や看護師、救急救命士など約130人が走った。初めて参加した愛媛大医学部附属病院の医師杉本龍士郎さん(43)もその一人だ。

「これまでは応援するだけだった」と杉本さん。同僚の医師らが楽しそうに走っているのは見ていた。上司から救命ランナーの参加を提案され、「まずは、走ってみよう」と決意した。年明けから準備し、靴、ウエアを新調。「愛媛大学病院」のシャツは職場からの提供だ。

ゴール手前約15キロからスタート。胸には白地に赤で「救命」の文字。ランナーと並走して、ふらふら歩いている人や、苦しそうに胸を押さえている人はいないかなどをチェックする。立ち止まっている人には声掛けをした。「初めてで、万一のことがないか緊張した」。結局、救命措置などの緊急事態はなくゴールした。

切れることのない沿道からの温かい声援や、途中に用意された食べ物などのおもてなしに「『愛媛マラソンを走ってよかった』と言われる理由がよく分かった」と満足そうに語った。来年も参加しようかと思っている。

(武田泰和)

周囲の走者の様子に気を配りながら走る救命ランナーの杉本龍士郎さん(中央)＝10日午後、松山市中西外

(C) 愛媛新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。